

令和7年9月20日

講演者：川村 優理（五條市史編集委員会 文学文芸部会長、NPO法人うちの館 館長）

父・川村たかしは、五條に生まれ育ち、大学を卒業後は五條市内の小・中学校、続けて県立五條高校で教鞭を執り、その後は奈良教育大学、梅花女子大学で児童文学の創作指導をする立場となりました。日本児童文芸家協会会長となって後は、同人誌「亜空間」を通じて、多数の創作者を世に送り出しました。

川村たかしが児童文学の創作に一步を踏み出したのは、最初に勤務した五條小学校で、生徒たちへの作文教育ために、彼らに読んで聞かせるための作品を書こうとしたからです。そのため作品の舞台の多くは、五條であり、「五條は紀伊半島のヘソ」という意味で紀伊半島となりました。

私は学芸員資格を取得後、父の執筆を手伝うかわら、勤務する藤岡家住宅（NPO 法人うちの館運営）でやはり五條市出身の文人藤岡玉骨（本名 藤岡長和）の所蔵する書籍資料を整理し、五條市を描いた文学・文芸作品が、時間と共に消失していく故郷・五條の風景をそこに残していることに着目することになりました。

そこで、『新五條市史』文学・文芸編は、歴史書には記されないけれども、文学・文芸作品に残されている「五條」を貴重な「記憶遺産」とであると捉えて編集しました。歴史として記録されない生活の風景の中に、この土地に住居する現代の人々が知るべき大切な知恵や、自然との付き合い方が書き記されているとも考えました。「特に人口の減少が目立つ五條市南部の地域の口承文芸は、民俗学を離れた言語文化学の視点を持ち込みました。

川村たかしにつきましては、教科書に収載されている作品など数点以外は絶版になっているものもありますが、昭和時代の五條の賑わいを描いたものが多く、なつかしいと感じる世代の方、その賑わいに驚く若い世代の方に改めて詠んでほしい作品を残しています。

『サーカスのライオン』（ポプラ社、1972年）は、現在も全国の小学生から多くの手紙が届きますが、作品の主たるテーマである「命」について、一人一人の生徒さんがそれぞれの意見を書いてくれることに感謝しています。『ツチノコ探検隊』（偕成社、1976 年）は父が俳句会で「ツチノコ」の話を聞いたことをきっかけに、実際に「ツチノコ」探しをした体験を元にしてしています。舞台は田園地区が開発される前の「山」です。『昼と夜のあいだー夜間高校生』（偕成社、1980 年）は、父が五條高校定時制夜間部で出会った生徒さんたちへの思いが込められています。『ふんどし校長』（出版：偕成社、1974 年）は、現在の五條東小学校のプールで泳ぎを学ぶ生徒と先生の心のつ

ながりを書いています。『まぼろしのカステラ』（実業之日本社、1971 年）は、大和二見駅前菓子店が舞台です。『山へいく牛』（偕成社、1978 年）は旧牧野村が舞台。『さすらいのコーチャン』（佼成出版社、1982 年）は、二見地区で賑わっていた夜店。『おてんばショコちゃん』（偕成社、1977 年）は史跡講演と五條小学校の子どもたち。『凍った猟銃』（偕成社、1976 年）は、西吉野でイノシシと戦った老人の物語です。

『新五條市史』文学文芸編が、五條のさまざまな風景を蘇らせ、次の五條への新しいヒントを提示してくれればと願っています。